

マタイの召し

2020.10.18
周東のぞみキリスト教会
マタイ 9：9～13

取税人、マタイのいた時代背景から説明致します。

当時、ユダヤはローマの支配下、植民地でした。

ローマ帝国が、このユダヤから税金を取り立てるためにしたことがあります。

ローマ政府は、ユダヤ人から直接税を徴収するとユダヤ人の反感を買うので税金の徴収の権利を入札制度にしました。一番高い値で買うと言った者に徴収の権利を売却したのです。

その権利を買ったものは取税人と呼ばれ、ローマ政府によって定められた税金高の上に、その費用（権利購入代）と自分や自分の下で働く役人たちの給与を加えた金額を税金として徴収しました。

当時のユダヤ社会では収入の30～40パーセントが税金として徴収されました。

また、取税人には2種類ありました。

- 1、ローマ直属の取税人
- 2、ヘロデ・アンテパス支配下の地方取税人。

です。

マタイは後者でした。

シリアのダマスコからヘロデ領であるカペナウムを経て、地中海岸へ通じる幹線道路が走っていたのですが、

- ・ その湖畔通りにここを通過する旅人の交通税。
- ・ ここに運ばれる貨物の物品税。
- ・ 湖の漁業税。
- ・ 背後に広がる耕地の産業税。
- ・ その地方一帯の人頭税（納税能力に関係なく、すべての国民一人につき一定額を課す税金）

があり、それらを徴収するために収税所が設けられていました。

さらに、ローマ直属の取税人もヘロデ支配下の取税人も共にローマ政府の協力者でした。

取税人は、宗教的には異教徒の仲間であり、

社会的には売国奴と罵られ、人殺し、盗賊と同類、人間の屑と呼ばれ、裁判の証人となることも出来ず、また礼拝に出席することも出来ませんでした（ルカ 18：13）。

しかし、これは確実にお金になる仕事でした。

取税人は自分の裁量で税金を課することが出来たので、その利益は莫大なものでした。

働く人にとって、今はとても暮らすのが難しい時期です。

医者もパイロットも、客室乗務員、旅行会社、車に関係する仕事もみなそうです。

自分が就職する時に例えて考えてみましょう。

この、取税人という職業に就くと村八分になり、周りからも政府からも罵りを受けると知りながらこの職業を選びますか？

マタイは己の生涯を金に賭けました。

金さえあれば幸福になれると考えました。

金が人生のすべてであると思いました。

金のためには、たとえ隣人に迷惑をかけようとも、また人々から守銭奴、売国奴、罪人と罵られても、村八分にされるのも覚悟の上でした。

しかし、不思議なことに、お金がなかった時にはお金は大きな魅力でしたが、いよいよお金が手に入ると、お金の魅力は霧のごとく消えてしまいます。

かえって醜さのみが鼻につくようになってしまうのです。

マタイ 9：9

取税人マタイは、そんな精神状態の時にイエス様から声が掛かりました。

彼がいつものように、収税所に座っていた時、イエス様から「ついて来なさい。私に。」と声を掛けられました。

マタイは以前から、イエス様のうわさは聞いていました。収税所に税金を納めに来た漁師のペテロ、ヨハネといった無学な者を弟子として巡回伝道しているイエス様のことは噂で知っていました。

取税人マタイは、イエスという人が盲人の目を開き、足なえを立たせ、悪霊を追い出し、貧しき者に福音を宣べ伝えていることも聞いていました。

イエス様に来るべきメシヤであることも聞いていました。

この人が人々の噂どおり、本当のメシヤであるかもしれないと、彼も考えていました。

その時です。

イエス様から声をかけられたのです。

「ついて来なさい！わたしに」

今日の主題は「マタイの召し」です。

召しとは、呼び出す、という意味であり、

マタイだけではなく、全てのキリスト者（イエス様を信じる人）が呼び出されています。

ローマ 1：1、6～7

教会は、ギリシャ語でエクレシアと言い、「エク」「カレオー」つまり、「～から呼び出された者の集まり」という意味です。

二人、三人わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからである。
マタイ 18：20、とイエス様は言われました。

物語のいきさつを辿って参りましょう。

9節

マタイは、収税所に座っていました。

そこへイエス様が通りかかられました。

原語で確認すると「ついて来なさい！私に」で、強い言葉で、命令形です。

「わたしについてこい！」 こんな調子の言葉です。

するとマタイは「立ち上がって、イエスに従いました。」

「立ち上がって、イエスに従った。」

は、マタイ自身の体験談を書いているわけですが、

この言い回しは、ただイエス様についていったということではなく、

彼は文字通り、イエス様に生涯をかけることに踏み切った、という意味になります。

マタイの背景を知ったら、その時だけついて行ったのではない、

持っているもののすべてをささげ、全生涯をその人にかけて生きる道を選んだ、という事になります。

税金取り、これは儲かる仕事でした。

彼はそれを紙屑のように捨て去りました。

しかも、それは一度捨てれば、再び戻すことが出来ないものでした。彼は文字通り、イエス様に生涯をかけることに踏み切ったのです。(かつて、ペテロたちも網を捨ててイエスに従いました。マタイ 4：20、22)

そのマタイの決意表明がこの祝宴であります。

10節です。

「イエスが家で」 誰の家でしょう？

その手掛かりがマルコの福音書にあります。

マルコ 2：14～17

マタイの福音書と並行記事です。

ここのレビとマタイは同一人物です。

レビは生来の名前であり、

15節、「イエスは彼の家で」 つまり、マタイの家で祝宴をしていました。

マタイ9章10節に戻りましょう。

マタイがこの祝宴を設けた意義は、何でしょう？それは、
罪の赦しにあずかったイエス様に対する感謝です。

彼は自分の家で、主イエス様のために「おおぶるまい」をしたのです。
主イエス様を知ったことに感謝しました。
取税人に好意を寄せる者は一人としていませんでした。
それなのにイエス様は自分に声をかけられました。
しかも、「ついて来なさい、私に」、と招かれました。
マタイにとってこのことは感謝しかありませんでした。

大勢、マタイの家に集まっていました。
イエス様、弟子たち、供の者、そしてマタイの同僚と親族も。

マタイにとってこの祝宴の意味は古き我への決別であり、
新しい生活への門出を記念する祝宴でした。

それは古き私の葬式であり、新しき私の誕生祝賀会でもありました。
彼は古い職業を捨てたと同時に、金銭への愛着も捨て去りました。

10節

「見よ、取税人、罪人が大勢来て、食卓についていた。」

大勢とは、50～60人でしょうか？

マタイにとってこの祝宴の意味は、また自分の仲間たちにイエス様を紹介し、自分がイエス様からかけがえのない存在として呼ばれた、その喜びを伝えたいという意味もあったのでしょう。

11節

ところで、このような常識外れの振る舞いをするイエスをじっと外側から見ていた人たちがいました。
パリサイ人です。

落ち度や責めるべきところがないかと目を皿のようにして観察し続けたところ、ついに見つけました。

なぜあなた方の先生は罪人と一緒に食事をするのか？

当時のユダヤ人は取税人や罪人は汚れた人々であるから、そのような人々と食事をすれば自分たちも汚れると考えて、決して彼らとは食事をしませんでした。

すなわちこれは明らかに差別です。

「取税人や罪人」、いつも取税人と罪人はセットで扱われています。

これは、自称義人、パリサイ人の目から見た、「取税人、罪人」という呼び方です。

その意味は、自分たちは律法を守っているから正しい、
しかし律法を無視して生活している取税人は罪人、という解釈です。

そういうわけで自称義人、パリサイ人たちは、なぜあなた方の先生は罪人と一緒に食事をするのか？と尋ねたのです。

それに対してイエス様はすぐ反応されました。

12～13 節

「わたしは、あわれみは好むが、いけにえは、好まない。」とはどういう意味か学んでください。

あわれみ、とは何か？

神からあわれみを受けるしか他はないという自覚、
人間が最もへりくだった姿です。

謙虚、とは何か？

神の前に罪人として出る姿です。

いけにえ、とは何か？

神に対してあれもこれも、こんなことまでもして仕えているという自覚、
神の前に自分の善行を持ってくる姿です。
それは最も高ぶった姿です。

高慢、

イエス様はそれを他の箇所でも適切な譬えで語られました。

それは、「パリサイ人の祈り、取税人の祈り」のところですか。 ルカ 18：9～14 をご覧ください。

マタイ9章に戻ります。

13 節

医者を必要とするのは丈夫なものではなく、病人です。

わたしは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。

自分は正しい、という人ではなく、

これは自称義人、パリサイ人に向けた言葉です。

自らを義人と主張するパリサイ人に対する皮肉です。

自分の真の姿に気づいていません。

この招きは、先ほどの取税人や罪人に限定されたものではありません。

罪人とは自らを義人と考えるパリサイ人をはじめとするすべての人を含んでいます。

実際に自らを義人と考えるパリサイ人ほど重病人で、手の焼ける病人はいませんでした。

彼らがその現実に気づいていないことこそ、もっとも深刻な問題でした。

私たちもそんな道筋を通して、今は教会に集っているのではないのでしょうか？

「自分が罪人なんだ」という事を知るまでは福音の意味が分からなかったけれど、

このことを聖霊とみことばによって示された時、イエス様の身代わりの十字架の意義に感激しました。罪の赦しに預かって、死後にも復活という希望があり、新しい世界への出発がありました。何と素晴らしい未来でしょうか。マタイはそれを得たのです。

さて、マタイについて聖書を見てみましょう。マタイの活動については福音書に数多く出てくるわけではありません。この箇所と12使徒の一人として名前が刻まれているだけです。

しかし！マタイは日夜、主イエス様のみもと近くにあって、主の御言葉に聞き入り、記録し、主の御業を見守り、記録し、恵みとまことに満ちた、イエス様のご人格に触れ、自ら感動し記録していったのです。イエス様が語られたメッセージ、生きた証を忠実に書き記した弟子でありました。

マタイは古き職業は捨て去ったけれど、ペンだけは捨て去りませんでした。彼は折にふれて、主イエス様の御言葉を書き留めていました。それをまとめて書き上げたのがマタイの福音書となったのです。イエス様の歩まれた足跡、教え、生活を事細かく文書にして書き記したのです。

そこから、写本の写本、書き写しの書き写しが1450年頃（活版印刷の発明の時代）まで続き、さらに、それはマタイの福音書として2000年の歴史を通して語り続けてきました。マタイの残した足跡は2000年もたった今でも私たちの手元に残されているのです。

そういうわけでマタイは実に偉大な働きを残してくれました。

イエス様が取税人であったマタイを召したように、あなたも召されています。イエス様は、今も私に、あなたに呼びかけています。イエス様を信じるという事は継続です。

「今日も、ついて来なさい！ わたしに！」
そして「明日も、ついて来なさい！ わたしに！」
そして、「明後日も、ついて来なさい！ わたしに！」

「ついて来なさい！ わたしに！」
とは具体的にはどんなことでしょうか？
それはイエス様の足跡に従う事です。その結果、私たちの働きは後世に足跡を残していくことになるのです。マタイがイエス様の呼びかけに従ってイエス様の近くを歩み、マタイの福音書という足跡を残したように、私たちもキリストに従って後世に足跡を残すものになりたいものです。お祈りしましょう。

牧師 草刈定雄